様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｋ１３３５１

研究課題名（和文）「デ・ステイル」とジョージ・アンタイルの構成美学

研究課題名（英文）'De Stijl' and principles of composition by George Antheil

研究代表者
池原　舞（Ikehara, Mai）

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・講師（任期付）

研究者番号：８０７１０４６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ジョージ・アンタイル（1900-59）の1920年代の活動に焦点を当て、当時の文化状況を踏まえたうえで、ニューヨーク公共図書館およびパウル・ザッハー財団に所蔵された一次資料から彼の芸術思想を掘り起こすことを試みた。アンタイルは、オランダで活動した造形芸術家グループ「デ・ステイル」の、とりわけピート・モンドリアン（1872-1944）の掲げた「新造形主義」における「抽象化」の手法にヒントを得ていた。サイレンやプロペラの導入は、一時的な機械音楽賛美の流行にのったものというよりも、数学的な次元や空間概念に沿って音楽を抽象化するためのアンタイル独自の表現手段だったのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、20世紀音楽の主要なトピックの多くと接点をもっていたにも関わらず、これまでほとんど明らかにされてこなかったアンタイルの1920年代の活動の思想的背景を、一次資料を用いて考察した。未来派以降の機械音楽時代の諸作曲家による諸作品はその奇抜性から類似思想をもつものとして捉えられがちだ。未来派の思想にはむしろ批判的で、デ・ステイルの造形化方法を演繹したアンタイルの芸術思想を明らかにした本研究は、両大戦間の前衛音楽再考に向けたケース・スタディとしても機能するだろう。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to focus on George Antheil's creative activities in the 1920s and to reveal his aesthetic thought, on the basis of the primary sources in New York Public Library and Paul Sacher Stiftung. The results of this research are presented that Antheil has obtained the hints from a method of the 'abstraction' in 'neo-plasticism' proposed by Piet Mondrian, who is a member of 'De Stijl', a group of Dutch artists. Consequently, the using of sirens and propellers as instruments to Antheil's works was the medium for his expression to abstract his musical idea in a mathematical and spatial dimension, rather than following the fashion in mechanical music era.

研究分野：音楽学

キーワード：アンタイル　デ・ステイル　機械音楽

１．研究開始当初の背景

本研究は、作曲家ジョージ・アンタイル（George Antheil, 1900-59）の 1920 年代の音楽作品における構成上の美学を明らかにする目的で開始した。しばしば、イーゴル・ストラヴィンスキー（Igor Stravinsky, 1882-1971）の二番煎じのように捉えられてきたが、長年のストラヴィンスキー研究の蓄積から、音楽構造上の特徴が異なることに確信はあった。しかし、その一方で、アンタイル独自の構成美学を具体的に論じようとすると、適切な批評的言語に欠けていた。これは、アンタイルに関する基礎研究が遅れていることにも起因している。アンタイルの作品に関する先行研究としては、リンダ・ホワイトシットによる『ジョージ・アンタイルの生涯と音楽：1900-59』（1983）がほぼ唯一の単著で、個別の作品研究も極めて少ない。

だが、アンタイルの功績を紐解くと、彼は 20 世紀の音楽の主要なトピックのほとんどと何かしらの接点をもっていることがわかる。例えば、《航空ソナタ（ソナタ第 2 番）》（Airplane Sonata (Sonata no.2), 1921） や《バレエ・メカニック》（Ballet mécanique, 1923-25, rev. 1952-53）におけるサイレンやプレイヤー・ピアノの使用といった機械音楽的な側面やクラスター奏法、《ジャズ・ソナタ（ソナタ第 4 番）》（Jazz Sonata (Sonata no.4), 1922 or 1923）や《ジャズ・シンフォニー》（A Jazz Symphony, 1925, rev. 1955）で扱われたジャズ風のスタイル、《ヘ調の交響曲》（Symphonie en fa, 1925-26）以降の新古典主義的傾向などである。そうであるにもかかわらず、あるいはそうだったからこそ、アンタイルの一連の作品は、多様さや折衷性といった曖昧な言葉でしか括られてこなかったのだろう。また、彼がアメリカの作曲家であるがゆえ、ヨーロッパを中心とした通史に位置付けるのが困難だったのではないだろうか。

２．研究の目的

近年、従来の音楽史記述の仕方への抜本的な見直しが進み、エアポケットに落ち込んだ作曲家の活動を掬い取ることによって、これまで見過ごされてきた歴史の新たな側面に光を当てることの重要性が認識されるようになってきた。とくに 20 世紀前半に立ち上がった前衛的な芸術活動の数々――音楽のみならず、美術、建築、文学、映画等――に大きく関わったフランスとアメリカのトランスアトランティックな相互交流の実態を明らかにしていくことは、歴史の再構築において不可欠であるはずだ。

そうした試みの一つとして本研究は、アンタイルの一次資料を丹念に読み解くことで、彼の芸術思想を掘り起こすことを目的とした。とりわけ、アンタイルがもっとも活躍した、そして様々なテクノロジーが飛躍的に発達し、芸術家にとって表現の可能性が一気に拡大した 1920 年代に焦点を当てた。

本研究では、音楽家として唯一アンタイルが属していたオランダの造形芸術家グループ「デ・ステイル（De Stijl）」としての活動に、彼の芸術思想の手がかりがあるのではないかと考え、彼らの機関紙『デ・ステイル』の講読を通じてアンタイルの思想的背景を紐解くことにした。おもに美術家たちによる中心的な論考から、このグループの主義や立ち位置を確認した上で、アンタイルの筆による三本の論文において語られた彼自身の思想が、具体的に音楽作品のなかでどのように具現化されているのかを分析することにした。

３．研究の方法

本研究では以下の 4 つの課題に取り組んだ。

(1)『デ・ステイル』におけるアンタイルの著作（「機械音楽のマニフェスト」、「音楽における抽象化と時間」、「私のバレエ・メカニック」）の講読
(2)《ジャズ・シンフォニー》における作曲プロセスの分析
(3)《バレエ・メカニック》における作曲プロセスの分析
そしてそれらの統合として、(4)1920 年代の作品における音楽美学と照らして考察

本研究に用いた主な一次資料は、ニューヨーク公共図書館（New York Public Library）に所蔵された「アンタイル・コレクション」およびパウル・ザッハー財団（Paul Sacher Stiftung）に所蔵された自筆譜である。

研究方法は概ね計画通りであった。しかし、(2)と(3)の課題において、楽譜から作曲プロセスが判明することを予測していたが、残されていた一次資料に作曲初期段階のスケッチの類が少なく、想定していたほど個々の具体的なプロセスは明らかにならなかった。
その一方で、それ以上に有用な、当時の演奏会プログラムや、雑誌の切り抜きなどの一次資料が充実していたため、より総合的に当時の文化背景を踏まえて、彼の作曲戦略を探ることに成功した。

４．研究成果

研究開始当初から想定していたように、アンタイルの思想は、「デ・ステイル」から影響を受けていた。しかし、画と譜面の視覚的な構成原理としての類似性ではなく、もっと深い部分での思想に共通点が確認されたことは、想定外であった。アンタイルは、とりわけピート・モンドリアン（Piet Mondrian, 1872-1944）の掲げた「新造形主義（neo-plasticism）」における「抽象化（abstraction）」の手法にヒントを得ていた。つまり《バレエ・メカニック》に見られた

サイレンやプロペラの導入や《ジャズ・シンフォニー》におけるノイズに近いサウンドは、一時的な機械音楽賛美の流行にのったものというよりも、数学的な次元や空間概念に沿って音楽を抽象化するためのアンタイル独自の表現手段だったのである。

この点をさらに掘り下げるために、しばしば共に言及されてきた「イタリア未来派」との繋がりを調査した。アンタイルは、確かに自身を「未来派ピアニスト」と呼称するなど戦略的に「未来派」というキーワードを宣伝文句に用いてきたが、実際には、その思想は袂を分かっていた。アンタイルは、むしろ未来派の思想には批判的で、彼らの芸術を単なる自動車や飛行機などの機械音の模倣だとみなしていた。

また、《バレエ・メカニック》におけるプレイヤー・ピアノの使用においては、ストラヴィンスキーからピアノ・ロールを譲り受けるなど実際の交友による触発が大きかったことが示唆された。ストラヴィンスキーが《結婚》においてプレイヤー・ピアノの使用を断念したのにもかかわらず、アンタイルは巨匠を超えるかのごとく、複数台の自動ピアノを用いることに挑戦した。その試みは、ニューヨークでの大失敗に繋がることとなったが、そこに至るまでの過程でアンタイルが描いていた作品像は、彼の言葉で言うところの「四次元の音楽」という壮大なプランだった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

・池原舞「ジョージ・アンタイルの「四次元の音楽」」、『国立音楽大学音楽研究所年報』 第 31 集、2019 年、107-128 頁、査読無。

〔学会発表〕（計 2 件）

・池原舞「アンタイルの構成美学 :《ジャズ・シンフォニー》と《バレエ・メカニック》を中心に」、『日本音楽学会第 69 回全国大会』、2018 年 11 月 4 日。

・池原舞「アンタイルの芸術思想 : 1920 年代前後の文化史のなかでの立ち位置」、『国立音楽大学音楽研究所 20 世紀前半アメリカ音楽研究部門講座 1 後期第 4 回研究会』、2018 年 10 月 26 日。

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。